

大津市教育委員会にみる徹底した保身主義

「蜂の死骸を食べさせられかけてて」

「男子生徒3、4人に囲まれて、トイレの隅っこで殴られたり蹴られたり、悪口を言われていた」（同じ中学の生徒）。

昨年10月に滋賀県大津市の中学2年生が自殺した事件で、生徒の自殺後、大津市の教育委員会はこの中学校の全校生徒を対象にアンケート調査を実施したが「自殺の練習をさせられていた」と、いじめと自殺の関係に深いと思われる回答が16人の生徒から寄せられていた。しかし、市教委は加害生徒に直接確認することもなく、この事実を公表していなかった。「調査をした結果、確認できたことは公表した。今回の分については事実だったと確認できていない」（大津市教育委員会・澤村憲次教育長、今月4日）そして、自殺との因果関係は分からないと結論づけた。

学校や教育委員会は、いじめの調査結果を一部しか公表していませんでしたが、不誠実な対応は、それだけにとどまらず、「(学校側は)事件当日から『誰かに聞かれても無視しとけ』『このこと(自殺の件)は、あまりしゃべらないようにとか。口止めみたいな』(同じ中学の生徒)男子生徒の自殺後、学校は在校生に対し、生徒個人やいじめについて口外しないよう、口止めしていたという。

大津市の越直美市長も、この口止めを認めている。「昨年、この事件があったとき、『いろいろ聞かれても無理に話す必要はない』と言ったことは聞いた。新しく何か(口止めについて)言ったという事実はなかったと聞いている」(大津市・越直美市長)しかし、6日。「きょう(校内)放送あった。全校集めた(校内)放送で、『変なことしゃべるなよ』って」(同じ中学の生徒)市教委は、「不確かなことを話さないように指導しているもので問題はない」としていますが・・・「かん口令というのは、情報をコントロールする手法。生徒の証言をコントロールすることになる。

事実解明に消極的に作用することを危惧する」(原告の弁護士・石川賢治弁護士)男子生徒の死亡からまもなく9か月。越市長は、教育委員会による調査が不十分だったことを認め、再調査に乗り出すことを決めた。

同級生にいじめを受けた大津市の中学2年生の自殺問題を受け、嘉田由紀子知事は6日、県教委を中心に緊急対策チームを設置する方針を明らかにした。県にも全国から批判が寄せられていることも明かし、報道陣の取材に「大変痛ましい事件。二度と起こしてはならない」と語った。県にはこの問題の報道を受け、県内外から知事宛てに「県は何もできなかったのか」「知事はきちんと説明すべきだ」といった批判のメールが6日夕までに97通寄せられたという。嘉田知事は「県としてなかなかできることがなく、今に至った。詳しく知れば知るほど、13歳の生徒がどれだけつらかったか、わが家の孫もちょうど中学生で、人ごとに思えない」と声を詰まらせた。

また、大津署が父親からの3度の被害届を受理しなかった問題に触れ、「警察は県民にとって最後のとりで。県民の安心が保てるような対応をお願いしたい」と述べた。県教委によると、大津市教委から詳細なアンケート結果を入手したのは「自殺の練習をさせられていた」というアンケートの内容が報道された後だという。緊急対策チームは来週にも設置し、大津市教委も参加予定。同市の調査結果について情報共有し、再発防止の恒久対策を練る。生徒の両親は真相の究明を求め、大津市などに損害賠償を求める裁判を起こしている。(TBSおよび毎日新聞記事引用)

この際、難しい言葉や単語は抜きにする。

無責任、厚顔無恥とはこのことだ。

大津市の教育委員会の記者会見を見ていると、まったく危機感がないと断ぜざるを得ない。加えて言えば、自分の立場を守ることに必死になっており、なんとか「この会見を逃げきろう」という姿ばかり。

あなた方教育者は、子供たちの将来を本気で考えているのか。学校という狭い世界でばかり生きてきて、子供を部下や手下と勘違いし、怒ることに慣れてしまい「叱られる」ことや「非難される」ことから逃げ出すことしか考えていない。

先生という字が「先に生きる」と書くことを理解しているのか。先に生きるということは、後に続く者たちに、模範を示し、諭し、正し、教え、叱り、学んできたことを伝えることなのだ。即刻、教育委員会の看板を降ろしなさい。

大津市長も、記者会見で涙を流すなら、なぜもっと早く行動しないのか。

滋賀県も、今回の事件がニュースとして大々的に報道されてから緊急対策チームを設置したところで、どこまで本気で取り組むというのか。この事件報道がここまで大きくなっていなくても対策チームを立ち上げていたのだろうか。すべては後手後手の対応だ。

事件が起きてから「大変なことになってしまった」と後悔する場面がまた繰り返されている。なぜ、事件が起きる前に行動ができないのか。

今回の事件や企業で発生する不祥事を見ていると、いつもいつも同じ場面が画面から流れている。本気で危機管理に向き合う姿勢に変化をしていかないと、この国は本当にだめになってしまう。(佐々木政幸)